

四日市の空

田口 鉄久

私の勤める園の裏手には、たびたび園外保育に出る見晴しの良い山がある。そこからは四日市のほぼ全域がながめられる。目につくのは、伊勢湾沿岸に広がる石油コンビナート群である。銀色に輝く円型、円柱型のタンク、上下左右にはりめぐらされた大小さまざまなパイプ。赤い炎、白い煙を出しつづける無数の煙突。

この石油コンビナート群は多くの喘息患者や企業災害の源であったにもかかわらず、四日市繁栄の象徴として長年において賞賛され拡大されつづけてきた。昭和四十七年夏、四日市公害訴訟に対する判決以後、公にその社会的責任をきびしく問われはじめ、硫酸酸化物の総量規制をはじめとするさまざまな対策がとられるようになった。最近では、四日市で風邪や喘息にかかる人は他市なみになった、とまで言われた。たしかに大気汚染度はある程度減少してはいるが、目にみえないさまざまな有害ガスは煙突から休むことなく出

されつづけ、公害認定患者をはじめとし、呼吸器等に異常を訴える人は増えつづけている。

子どもや老人——なかでも体力の弱い者ほど大気汚染の影響を受け健康を阻害されている。園児にも、鬼ごっこで力いっぱい走ったりすると夜になって喘息が出て苦しんだり、鼻の粘膜が弱くて鼻血が出やすかったりする子はクラスに一人や二人はいる。健康な者でも夏が近づくと目がチカチカする光化学スモッグに悩まされたり、悪臭で頭痛を感じたりもする。

しかし、恐ろしい事に、「きれい」で、「おいしい」空気を味わって来た人には、四日市の空気は「きたなく」感じても、四日市の者にとっては「多少臭う日もある」ごく普通の空気なのである。保育者となってはじめて四日市へ来た時、鼻をつく臭いに驚いて「いやなおいがするね」と子どもに聞いかけたら、「なんにもにおわないよ」と返されて啞然とし

たが、七年たった今では自分もすっかりこの空気に慣れてしまった。

仰ぎ見て深呼吸をする価値のない四日市の空に「おいしい」空気の流れる日がこなければ、本当の人間の生活は送れないと思う。

私はいわゆる男性保育者である。幼児教育で重視されている幼児の気持ちや考えが理解できる保育者になることや、幼児の遊びが豊かになるような配慮のできる保育者になることの重要性を感じ、それなりの努力もしようとしているが、いつも大きな壁につきあたってしまう。そしてつくづく幼児教育は高度で微妙な精神的活動を要する広範囲な仕事だと思ひ、沈み込んでしまう。そんな時、せめて子ども達と愉快に遊び回ろうと戸外へ飛び出していく。あまりにその回数が多いので、私は子ども達と「戸外でよくあそぶ」保育者となってしまった。

四日市の空でも天気の良い日は見た目には美しいし、戸外は室内よりも気分がいい。たかたかとうばん、ひょうたん鬼、はじめの一步、陣とり、かんけり、宝とり、オリジナルの道鬼、野球ごっこ、ドッジボール、サッカーごっこ等々保育者主導型のきらいはあるが、子ども達も実に元気よく遊

ぶ。こんなに真剣に活動に参加し、喜ぶ子ども達の姿に接すると沈んだ私の心も晴れてくる。

ところが、身体を動かす戸外での遊びを離れるとやっぱり伝統的な真の幼児教育には七年たった今でも近づくことさえできないで悩んだのである。四日市の空気にはもう慣れてしまったのに。こんなにもむずかしい幼児教育に飛び込んだことに後悔さえするのである。しかし、最近私は自分の母のとったある行動の意味を考え、一步ふみ出す立場でもう少しがんばろうと思うようになった。

一昨夏、岐阜の田舎で大病をした一人住いの母は、大きな病院もなかった事もあって、私達の住む三重の地へやってきた。一年程の入院・治療生活の後、多少回復し再び田舎へ帰って行った。時々私も遊びに行くが、母は世話になった事に感謝の気持ちをあらわしながらも、都会は「いきぐるしい」と言っている。田舎ほど人的なつながりのないあわただしい団地生活では「生き苦し」かっただろうし、空気の悪い都会ではまさに「息苦し」かったに違いない。

だがそれは都会に住みつづける私たちのような人間にはさほどにも感じない事なのである。

(四日市市立泊山幼稚園)